
About Life basis

空都アキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

About Life basis

【Nコード】

N0224Z

【作者名】

空都アキ

【あらすじ】

何の変哲も無い生活

変わっていく生活

色々なことに巻き込まれていく主人公の物語

2028/4/10/Mon くプロローグ (前書き)

物語が色々な方向に枝分かれしていくので読み辛いかもしれませんがご了承ください。

更新速度はそんなに速くないので気長に読んでもらえれば幸いです。よろしく願います。

2028/4/10/Mon くプロローグ

これから通う高校の入学式を終え、体育館から教室までの道のりを、群れをなして移動する。

その行動が、ついこの間おこなった中学校の卒業式を思い出させる。

中学校卒業まじかに、この空都市に引越して来た為、転校先の空都中学には一ヶ月もいなかったため、卒業式は感慨深いものにはならなかった。

おかげでクラスに馴染む事も友人を作ることすら出来ずに、高校入学となってしまった。

いろいろ考えていると教室にたどり着き、他の生徒同様に自分の席に座り、自分より後に座り始める名前も知らない生徒達を眺める。

入学式前のホームルームで自己紹介等は済んでいるが、正直なところ聞いていなかったため最初の相沢しか覚えていない。

その後、担任の白浜先生に学校の説明や部活、アルバイト、授業等の説明をされて解散となった。

入学式前にクラス割を見て、転校前に通っていた中学時代の友人等はいなかったため、まっすぐ帰る事にする。

学校の校門を出たところで、携帯で姉の木柳 カナに電話する。

「学校終わったの？ 迎えに行ってもいい？」

察しのいい姉は、俺が何も言う前に用件とそれに対するの提案をしてくれる。

「終わった。校門の前にいるよ」

俺もそれに対して完結に答える。

「じゃあ今から迎えに行くね」

「わかった」

電話を切ってから携帯をいじりながら、空都高等学校と書かれている看板が立てかけられた校門に背もたれて姉の迎えを待つ。

本当なら自転車で登下校して帰る予定だったが、姉が入学式ぐらい一緒に昼食をしないと、駄々をこねたので仕方なく食事に行くことにした。

下校していく生徒と携帯を交互に眺めながら待つこと十五分、校門前の道路に黒のオープンカーに乗った姉がやってくる。

まじで目立つのでその車で来るのやめてください。

「やっほー！ 雅也〜！」

俺の名前を叫ぶテンションの高い姉に、周囲の生徒が足を止めて視線を向けている。

姉は気にもせず、背中ぐらいまである茶髪のポニーテールを振りながら満面の笑みで俺に向けて大きく手を振って来るが、正直他人の振りをしたいけどそうもいかないだろうな。

痛々しい姉をこれ以上放置するわけにもいかないので車に乗る。

その時に感じた周りからの視線は、間違いなく俺に向けられていただろうな。

走り出した車から通り過ぎていく生徒を見ながら、俺のテンションが暴落していく。

「学校はどう?」

姉とのドライブから数分、いきなりの質問にあんたのせいで先行き不安だよとは言えず。

「よくわかんない」

と簡単に答える。

さっきの一件以外で、入学初日に感想を聞かれてもまだ小説でいうところのプロローグの現状であり感想も何も無い。

「そつなの?」

そつなんです。

「ところで何食べたい?」

「え!?!」

驚いた。

今、思ったことはそれだった。

なぜなら、常に予定をたててそれに則って行動をしている姉が俺に相談してきたのだ、姉を知っている者は誰でも驚くだろう。

「ど、どうしたの？」

「何が？」

姉は今の自分の発言が良くわかっていないようだ。

「どうしてって!？ いつも予定をたてているのに決めていないなんて!」

「バカ! たまには可愛い弟の行きたいところでも連れて行ってあげようという、お姉ちゃんのお持ちはわからないの?」

一瞬ではれる嘘泣きをしながら、姉の好意にどう答えようか考える。

「いやいや、行きたい所って言われても、俺空都市に来たばかりだからわからないって」

「それもそうね……」

それに、金を出すのは姉何だから俺に決める権利なんてものはない。

「さて、どうしようか？」

「今日は仕事何時までなの？」

姉の仕事の予定を聞く。

「今日は夕方からだから時間はあるわよ」

姉の仕事は不定期だ。

仕事の内容は家庭教師、といっても金持ちの息子相手の家庭教師なので凄く大変らしい。

「なら、姉さんの作ったご飯が食べたい」

「あらあら、雅也君は甘えん坊さんですね」

嬉しそうな顔をしながら俺をけなしてくる姉を無視して、流れる景色を眺める。

「じゃあスーパーに寄ってから家に帰るわよ」

「はいはい」

「返事は三つ！」

「ウザいです姉さん」

そんなこんなで、買い物済ませてから家に帰りつく。

二人で住むには少し大きい二階建ての一軒屋、その二階に俺の部屋と姉の部屋がある。

一階は食事や風呂の為に使っている。

俺は部屋にいき、制服のブレザーとズボンを着替えてからリビングに入る。

それから、姉が作ったオムライスと一緒に食べ、父さんと母さんの遺影の前で入学の報告を済ませて、姉が出かけるまで一緒にテレビを見たりだらだらした。

「それじゃいつてくるね」

「いつてらっしゃい」

姉を見送ってから俺は部屋で横になり一日を終えた。

登校二日目の朝、けたたましい音で目を覚ましあくびをしながら目覚しい時計をきる。

俺の朝は早い。

姉が寝ている間に弁当と朝食を作り、仏壇にお米と水を供えて手を合わせる。

それから一番大変な姉を起こしに行くというイベントをこなすべく、姉の部屋を訪問する。

「姉さん朝食できたよ」

返事がないただの寝坊のようだ。

仕方無いので部屋の扉を二回ノックし、再度返事がないことを確認して部屋の中に入る。

部屋の中は足の踏み場も無いほどのプリントで埋め尽くされており、姉はベッドの上で布団もかけずに服を着たままつつ伏せで寝ていた。

散乱するプリントを拾いつつベッドまでの道を作る。

「姉さんおきて」

優しく背中をさするがおきる気配がない。

「起きろよ飯冷めるぞ」

強く体を揺らすのが全然起きない。

「まったく」

俺は携帯を制服のポケットから取り出し姉の携帯にかける。

部屋中にドラマの主題歌が響き渡る。

「はい！ 木柳です！」

勢いよく飛び起きた姉は、枕元にある歌い続けている携帯を手にする。

「おはよう真紀さん。いい加減飯食いにこいよ」

「ああ。おはよう雅也君、朝食のメニューを教えてくれたらお姉ちゃんは嬉しいな。なんて」

「ハハハハ」

俺は携帯を切り、笑いながら曲げた中指を親指で押さえ姉に近づく。

「いや……やめて……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0224z/>

About Life basis

2011年12月2日14時48分発行